

愛された川、神田川

匿名希望

私の家の近くに、区の教育委員が立てた看板があった。「神田川は、かつて江戸っ子たちの自慢であった」

水道は江戸っ子の自慢の物の一つで、「水道の水を産湯に使い」などと言う言葉がよく使われるのは、この神田川に由来する。当時“整備された水道”を使えることは、都会っこの証だったのだ。



いまその“自慢の”神田川は、黒緑色に淀み、高速道路の高架下に流れているため、晴れた太陽のもとでも必ず影をていしている。フォークシンガーかぐや姫の代表歌、神田川で知られるように、どこか陰鬱としたイメージの付きまとう川である。事実、夏には異臭を放ち、年中見栄えも悪い。

私は神田川の流れる江戸川橋という地に住んでいる。まぎらわしい名前だが、江戸川区ではなく、文京区にあたる。すぐ西は早稲田大学、東には東京ドームがある地域だ。



ごく最近越してきたため、数年前の姿は知らない。しかし、去年の夏、クルに流されて命を落とした水道工事員の方々の必死の捜索がこの付近で行われており、多くの報道陣が占拠していた。うねり狂う濁流を目の前にしたとき、普段はみぬ神田川の恐ろしい部分を見た気がした。そのとき、ある会話を聞いた。このあたりに昔から住むおばさんがたのお喋りであったのだが、数十年前に神田川はよく氾濫したらしい。この地域は水没して大変であったが今では対策がなされ、そうした水害はなくなった、というものだった。

そのころからあまり気に留めることのなかったこの川のことを考え始めるようになった。そのような新たな対策に興味を持ったと同時に、昔は「自慢の川」であった神田川がなぜ哀愁の象徴であるかのような陰気な川になってしまったのか、調べてみることにした。私は、神田川の歴史を調べるため、東京都水道歴史館を訪れた。

産声を上げた神田川 —東京都水道歴史館にて—



神田川は、もともと流れていた川ではない。人口の川なのだ。誕生は江戸時代にさかのぼる。

江戸は海辺を埋め立てて作られた町のため、井戸を掘っても真水を十分に得ることができず、水の確保が問題となっていた。そこで、赤坂に元からあった溜池が活用されるとともに、井の頭池を水源とする、神田上水が造られた。江戸で最初にできた本格的な上水道で、1603年（慶長 8年）に給水を開始し、1629年（寛永 6年）に全体が完成した。



人口河川を生み出す困難さは相当なものだっただろう。



この二人は、庄右衛門・清右衛門といい、玉川上水工事を取り仕切った。

玉川上水工事は、神田上水と溜池上水で江戸を支えられなくなったため、計画された上水道で、工事は苦難の道であったという。水を流してもすぐに干上がってしまい、なかなか上水道として機能しなかったのだ。



苦難の歴史を知れる人形劇があった。

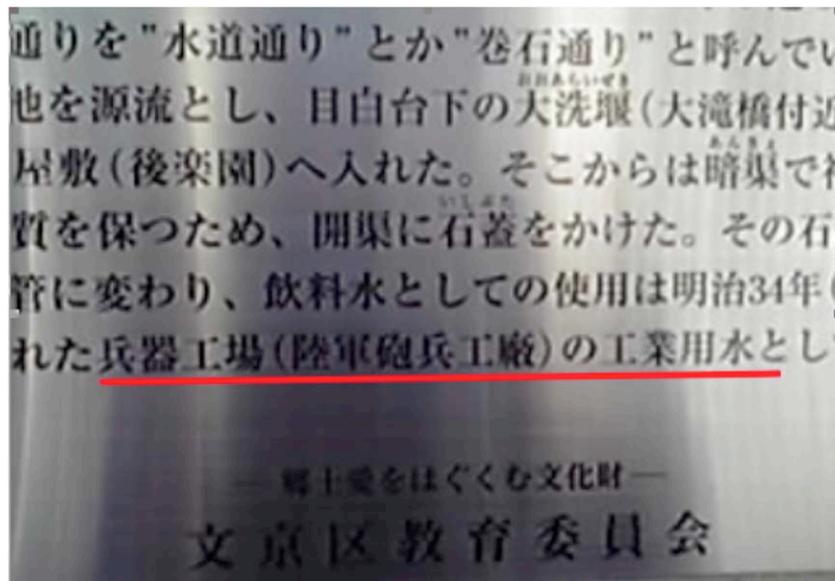


館内には、江戸の町の一角が再現されており、上水道が生活用水として使われていた説明がなされていた。一般的な湧水の井戸でなく、流れてきた水を溜めて使われた井戸である。こうした井戸は、江戸っ子の産湯に使われるのはもちろん、生活の要であったのである。

神田川は、江戸の人々の命を支えていたのだ。

人の命を支える水道から人の命を奪う水道へ

水道歴史館の帰路、地元の地域を散歩していて驚くべき看板をみつけた。



神田上水の飲料水としての利用は明治34年（1901）年までで、以後は水戸屋敷後に設けられた兵器工場（陸軍砲兵工場）の工業用水として利用された。江戸っ子自慢の神田川、生活の要の水道が、のちには戦争の道具として使われたというのだ。人の命を生かすためつくられた水道が、のちには人を大量に殺すために利用されたのだということであった。彼らが知ったら、どう反応するだろう。



戦後、江戸っ子自慢の川は、「どぶ川」となった

神田上水廃止後は、高度経済成長期にどぶ川と化した。いまの神田川の汚いイメージの始まりはここにあったのだ。どぶ川汚染の理由は、下水流入と護岸工事だったという。

護岸工事によってコンクリートに固められた神田川は、汚れた水を地中に浸透させることができなくなった。水は自然の浄化作用を失い、悪臭を放つようになった。高度成長期、都市河川は排水溝同然の扱いを受けていたのである。同時に、水害も増えていった。コンクリートに囲まれ、逃げ道がまったくない雨水は、すぐに川へと流れ込む。海まで距離があるため、川の許容量を超えればすぐに川の水はあふれてしまう。

東京都市整備局によると、昭和30年代に神田川流域区部西部でも、大きな浸水被害が発生するようになった。昭和33年9月の「狩の川台風」による都内の被害は、死者203名に及び、戦後最大の水害が発生した。昭和60年代に入ると、施設の整備が滞り、被害は大きく減少した。住民が国と東京都を訴えたのだ。



災害対策施設のひとつとして、高田馬場分水路が作られた。地下に延長約1.2kmの暗渠を設置することで増水時の水を逃がすことができる。さらに、上流の妙正寺川には数カ所に調整池が作られた。また、東京の環状道路である環状七号線の地下40mに作られたトンネルを利用した巨大な調整池がある。

現代っ子も自慢できる神田川へ

一方、汚れきった川の水をきれいにする試みは、下水処理から始まった。昭和39年神田川沿いの落合に下水処理場（現在は水再生センター）が建設された。これにより、東京西部の生活排水や雨水の処理を行い下水が神田川に流れ込まなくなると同時に、処理した水を川に戻すため、川の浄化ができるようになった。

東京都では、東京都景観条例（平成9年東京都条例第89号）に基づき、景観づくり基本方針を策定し、東京の景観づくりを進めている。これにもなつて「神田川景観基本軸基本計画」及び「神田川景観基本軸景観づくり基準」が定められた。



現在、神田川で生息が確認されている魚は 20種類。アユも生息が確認された。コイ以外の魚は、ブラックバス、ブルーギルなど大型の放流魚がある。他には、オイカワ、タモロコ、タナゴ、トウヨシノボリ、ドジョウなどが生息している。

江戸時代にはホタルの名所で有名だった神田川。またホタルが見られる日が来るのか。



時代の流れとともに人々を生きし、殺し、発展の要となった神田川。

その見栄えから、親しみはおろか、嫌悪すら感じていた私だが、調べてはじめて数百年前には人々にありがたがれ、愛されてきた川であったと知った。また、この川が再び愛されるようにと立ち上がっている現代の人々の努力があることも。無関心でいては、川は放置され、汚水が流され、やがては私たちに負の産物をもたらすだけだ。

一度傷を追った川は、人々が愛のまなざしを向けることで初めて、新たな命の産湯として生まれ変わるのだ。

<参考>東京都水道局（文京区本郷）

神田川に架かる140の橋 <http://kandagawa.kingtop.jp/>

神田川逍遥 <http://www.kanda-gawa.com/>

神田川ホタル祭 http://www.suginamigaku.org/content_disp.php?c=440fd1bc6b228&n=4

東京都都市整備局

http://www.toshiseibi.metro.tokyo.jp/topics/h19/topi020_6.pdf